

海へ彼才の空遠く

米谷小幸

海へ彼方の空遠く

赤谷小み子

海の彼方の空遠く

TALES OF INTER MARRIAGE

一九八九年一月三十日 第一刷

定価 一〇〇〇円

著者 米谷ふみ子

発行者 豊田健次

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三―三
電話代表(〇三)三六五―二二一

印刷所 理想社印刷

付物印刷 凸版印刷

製本所 矢嶋製本

万一、落丁、乱丁の場合は
お取替致します

© FOUMIKO KOMETANI 1989 Printed in Japan
ISBN 4-16-310740-1

目次

義理のミシュパツハ	5
海の彼方の空遠く	95

海の彼方の空遠く

TALES OF INTER MARRIAGE

裝釘 著者自裝
題簽 米谷富左子

義理のミシュパッハ

雨が降ったのは四月やったかしら。もう今日は七月一日。夏は一日でも水撒きを怠ると、南カリフォルニアは元の砂漠にもどってしまいます。

庭に植えた富有柿に粉をまぶしたような青緑の実が付きました。上村松篁さんの日本画で見た青柿を想い出し、あんまり色が綺麗やから、これにはたんと水をやりました。

この二、三日、やけに暑うて、乾燥し、肌が乾いた鱗のようです。

晩御飯の仕度をしようかと、帽子を取って屋内に入って来たわたしに、夫のレニーが言いました。

「シーモアの家で、いとこ会をするって言ってただろ。ニューヨークの出版社との仕事を兼ねて出席しようかなあ」

最近生やし始めた髭は、剃るのが邪魔くさいので放っておいたら、そうなってしまった恰好。禿げ頭の縁に生えてる白髪混じりの頭髮は、ちりちりと伸びています。頤のところ

の鬚に、昼食の時のコール・スローのキャベツが乾いてひっかかつてるのを見詰めながら、

「何日のつもり？」

とわたしは尋ねました。

「まあ、五日ぐらいかな」

レニーは眼鏡の底の榛色^{はしばみ}の眼を瞬いて答えました。

わたしは流しで手を洗いながら考え込みました。夕陽が梨の木の梢を通して流しの汚れを顕わにしています。五日も留守にされると、実は、わたし、怖いんです。上の息子エリックはパリの学校に行き、下の脳障害児マークは施設に入りましたので、家に一人になります。一晩ぐらいなら寝ずに震えていても何とかありますが、五日にもなると、震えっぱなしでは、殺人鬼が入って来なくても死んでしまいます。人を見れば爪を立てる猫もおらんようになりましたし、トフンガ、ラ・キンタ、ククモンガ、チコというような所で続けざまに人が殺されていますので怖いのです。で、残りとうはありません。

夫は今年は是非行つて、小さい時、よく遊んだいとこ達が、永年見ぬ間にどんなになつたか知りたいし、又、彼等の子供も見られるだろうからと言ひ出しました。

併し行くというても参加するという返事も出してないのとわたしは夫をたしなめまし

た。

「いいんだ。遠方から参加するだけで皆喜ぶよ。それに、知らせなくて、急に現われると驚くだろう。それだけで、充分じゃないか」

「ポット・ラック・ランチ（一皿ずつ作って来る）ていうてはったでしょ。旅先では料理も出来へんしね」

「いいんだよ。僕はダイエット中で、何も食べられないしさ。君だって小鳥ほどこか食べないじゃないか。皆、いとこ達も僕と同じように年寄って来たんだから、そんな大喰いはないし、余って困るに決ってるから代りに、ワインを買って持って行こう」

わたしは炊飯器を取り出して、お米をメジャー・カップにすり切り一杯入れました。

「いとこ会カズン・レユニオンで何時いつから始まったん？」

と背後に立っている夫に尋ねました。

夫が言いますには、いとこ会なるもんは、何でも、お墓の土地を母方のミシュパツハが集って買おうということから始まったんだそうです。

「ミシュパツハで何やのん？」

「イエディツシュで家族という意味さ。ユダヤ人の家族ってどんなものか知ってるだろう。

イトコもハトコもきょうだいのようなものだ」

母方のきょうだい、九人が年を取りだしたので、いずれ死ぬことは眼に見えている。一人が死ぬ度に墓地を探して買っては高くつく。つまりユダヤ教では死んでから二十四時間内に埋めろという掟があるから余計に墓地を用意しとかなければ大変なのだ。用意をしていないと、死んでからあっちの墓場、こっちの墓場と皆ばらばらに埋められることになる。それで、今土地の安いうちに、九人と、それに属しているミシュパツハが組んで買えば安く買えるし、皆同じ所に埋められることになる。クリブ・トゥゲザ・アンド・ダイ・トゥゲザ（生きるも一緒死ぬも一緒）というスローガンなのだそうです。

「なんや、大量殺戮が理想というようなスローガンやね」

とわたしは手を拭きながら茶化しましたので、レニーが冗談にもそういうことを言うなというふうにぎろつと睨みました。

兎に角、ジョナ・アンド・セラ・シルバーマン・ファミリー・サークルという名のオーガニゼーションを作ったのやそうです。（大げさやねえ、ほんまに）二十四時間内に埋めるのは、伝染病なんかの場合、早く埋めないと菌が散るからなんだそうです。（焼いたら心配は要らんのに。灰壺だけになって埋めることも要らんし。死体を埋めると菌だけは死

んで、体はそのまま残るとおもてるのやろか。キリスト教と言ひユダヤ教と言ひ、土地があるからそれ以上のこと考えへんのや」このモダン・エージに、両親があつちとこつちに埋められていては時間の浪費である、子供達に親切なようにという考えに基いてなんだそうです。

その墓地グレイヴヤードの件を論議するために、レニーのおじ・おば達が子供達を連れて順番に一軒ずつ回り回りました。大変な御馳走をその当番に当った家族がしたらしいです。おじやおばが「お墓グレイヴの件で、お墓グレイヴの件で」と言ってるのを子供達が聞いて、「グレイブ」とは「お墓」と又「重要な」という意味がありますので、子供達は「重要な用件、重要な用件」と冗談を言い合つたそうです。その会というのが又、大変なんだそうで、皆それぞれ意見があつて、誰かが、「ハイウェイの近くに安い墓地の売り出しがあつた」と言うと、「オイ・ペーあ、そんなところは喧しくて心が安まらんがな」とか、「ロングアイランドに行けば安い」と言うと「あんな遠いところに埋められるのはかなわない」とかなかなか決まりません。それで、遂に、投票で決めようということになりました。初めは、女を入れないというので、又揉めて、やっと男女平等に投票をしたということです。

さて、埋める順番なんだそうですが、夫婦隣り同士と言つても片方かなかなか死なない

と、そこが空いたままになり、複雑になるから、死んだもん順ということにけりがつきました。嫌っている者同士でも隣り合うことになりかねないのだそうです。

第二のグレーブ・マターの目的は、フラットブッシュ、ウィリアムズバーグ、コニー・アイランドと、この広いブルックリンに散らばっているいとこ達が、二ヶ月に一回会ってお互いをよく知りあっておくことは大切であるということなんだそうです。

「ブルックリンに散らばってるやなんて、散らばってるとは言われへんよね。わたしやったら、ブルックリンに固りすぎてる言うけどね」

「彼等にしてみたら新しい国に来て、やっと落ちついて来たという時だからね」

この話を聞いていると、なんでわたしが行かんなんのやろと思ひ始めました。お墓なんてわたしには関係の無いことで、わざわざニューヨークのレニーのおじおば、いとこ達の間で、ユダヤ教徒でもないわたしが、いや、八百万の神を信じてない宗教を嫌ってるわたし、酷暑酷寒のニューヨークの墓に埋めてもらいとうもありませんし、死んでからまでユダヤ教の星を墓につけて義姉・バーサと睨み合いなんて、ほんとにしんどいことですわ。わたしら灰にして太平洋に撒き散らしてもらいます。

「あなた、バーサが来いって言い合ったから、怖いから行くんでしょ。そうに決ってるわ」

と言いながら、あのしかめっ面の、レニーのたった一人の独身の姉を脳天に描いて急いでお米を研ぎ、水をメジャー・カップ一杯入れ炊飯器の蓋をしました。

ニューヨークには今、わたしの弟がおります。私より三歳下です。弟は単身赴任です。で、あの子のアパートに泊っても遠慮は要らんとします。それに、赴任以来四年間大して話もしてませんので、どういう住み方をしてるのかあの子が帰国する前に見ておくのもええやろと考え始めました。弟はQ商事の支店長として四年前ニューヨークにやって来たんです。詰り、現在日本の国の経済を支えてる貿易をしてる訳です。日本から来たばかりの時、夫のレニーがニューヨークに仕事があったので付いて行こうと思って、「泊らせてもろてもええ？」と電話をした時、「けったいな恰好して来るなよ」とのいきなりからの挨拶で、頭に血がのぼりました。

あの時、早速この近所に住んでいる日本人の友達に、けったいな恰好とはどういう恰好なりやと尋ねてみました。その友達は、トラベル・エージェンシーで働いてますので、フリーの航空券が常時手に入り、絶えず優雅に、東京やニューヨークやと飛び歩いてます。

世界中で、つたいな、恰好とはどんなものかを尋ねても知っていたからです。

「あのね、日本から最近いらった方って、すぐ判るわよ。奥様も旦那様も、なんだか、何々氏製造ってすぐ判る、お値段のお高いものをかちかちにお召しになっていらっしやるでしょう。支店長様の奥様方って、殊にそうなんですよ。こちらに永くなる方は、それが徐々に崩れて、アメリカ式に感覚がおなりになるんだけど。今で一番ハイカラなのは、ジョギング・スーツのようなスポーツ的なものでしょ。でも、イースト・サイドの支店長様が入りなされるようなアパートでは、日本人の奥様方はぎよつとなさるでしょうね。日本から見た良い恰好と、アメリカから見た良い恰好とは大変違いますのでねえ。弟さんも暫く滞在なされば判ってこられますよ」

と彼女は笑いました。

わたしは、大体着るもんには無頓着です。そうなつてもたんです。アメリカに二十五年昔、キャンバスや絵具や着替えを持って、船でやつと辿り着いた時、立派な胸をぐつと張った、背の高い白人や黒人の女の人を見て、こりゃ太刀打ちできんと思いました。この人達に合わせて創り出された洋服を、戦争中に育った胸も画板のように平らな、みじんこの如き女が着ても、それが、カルダンや、シャネルやというたデザイナーのものであれ、